
君にしかできないっ！

中い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君にしかできないっ！

【Nコード】

N1931Z

【作者名】

まい

【あらすじ】

とある魔術の世界。少し名の売れた孤独な魔術師の青年は、とある人助けを機に人生を狂わせてしまう。

…これは好転か？悪化か？

変化の前に

【〽〽変化の前に】

こんな夜は、アレに限る。

彼は、レンガの壁を撫でながら、ゆっくりと、地下室へと続く薄暗い階段を下りた。

左手には三十センチほどの『魔法の杖』が持たれており、杖の先にはあたりを照らすには十分な光がともっている。

地下室へと降りた彼は、一度、杖を振る。

すると、あたりの蠟燭と、天井の小さなシャンデリアに乗せられた蠟燭の全てに火が灯った。

地下室は一瞬にして、優しい橙の光に包まれる。

そこは大きな倉庫だった。

倉庫には等間隔でいくつかの棚が配置されており、棚にはガラスボトルが並んでいる。

「今日はこいつだな」

その中から一本、彼はボトルを取り出した。

光一つ取り残さず反射するほど美しく磨かれたボトルの、赤いラベルには、白い文字で「ミュンジューズ 1246」と書かれている。

彼はアルコールが嫌いだ。

摂取推奨年齢である二十歳に達していないというのもあるが、アルコールは魔術者の体中を巡る魔術線を侵し、魔力の流れを乱雑にして魔術の精度を下げてしまうからだ。

しかし彼は、アルコールとは比べ物にならないほど、このジュースを愛している。

秋が旬のミュンは、桃色をした完全なハート型の果実で、甘みが強く、その影にツンと刺すような酸味が覗く味を持っている。

このジュースは、そんなミュンを絞ってジュースにし、何年も寝かせたものだ。

寝かせれば寝かせるほど、ミュンの甘みは穏やかなものとなり、独特の酸味はその棘を丸くする。

彼が今、手に取ったのは、その百年ものだ。市場価格にして、20000グランの代物である。

ちなみに参考として、この国で最もベターなジュース『ライフギル』は10グラんで買える。

重ねて参考として、この国の平均年収は150000グラムだ。

彼がボトルを手に取り、階段出口のすぐ隣の壁に貼り付けた紙に取り出したボトルのナンバーを書き込むと、来た時と同じように杖を小さく振って全ての光を杖の先に集めて消し、階段が上がっていた。

階段を上がって一階に出ると、まず木のダイニングテーブルが目飛び込んでくる。

白いテーブルクロスがシャンデリアの光を照り返した。

彼はテーブルにミュンジューズを置くと、キッチンでポトフを浅い皿に盛り付け、テーブルへと運んで、一人で食事を始める。

「やはり、ガロージャの百年物は格別だな」

そんな独り言も、誰の耳にも入らず、宙を舞った。

こうして彼は、また一日を終える。

孤独な、一日を。

変化の予兆

【〓〇〓〓変化の予兆】

相も変わらず完璧な朝だ。

彼は、満足気な表情で食卓にトーストを並べ、ウインナーが三本と目玉焼きが乗った白い皿を同じく食卓へ並べた。

彼こだわりのコーヒーを配膳すれば、完璧な朝食である。

「さて、頂くとしよう」

齢十八とはいえ、元貴族。

礼儀正しく食器を取り、料理に手をつけようとした。

刹那、ドアが何度も叩かれる。

彼はつい眉を顰めた。

起床時の空腹は、少なくとも彼にとってとても不快なものだったから。

だが、客人をもてなすのも礼儀だ。

ドアを叩く音が家中に響く中、ハンガーに掛かったマントを羽織り、腰の右側に自慢の杖『ヴルカーノの六番』をホルスターで吊ると、覗き窓を開いて外を見た。

しかし、相当背が低いのか、覗き窓からでは誰の影も確認できない。

仕方ないと、彼はドアを開いた。

「遅れて済まない」

そう言った直後、彼の瞳に真っ赤なコートが焼きついた。

彼は、すばやく一步距離をとり、ホルスターから六番を抜く。

目前の人間は、赤いコートに赤いベスト、裾を絞った白いズボンを着用していた。

この服装は、彼が最も嫌うものだ。

「その服装：リバルド帝国軍の魔術研究ギルドの人間と見受けるが、貴様は何用でここを訪れた。言っておくが、私はもう魔研ギルドに戻る気は無いぞ」

強い語勢で言い放つ。

彼は祖国である、リバルド帝国の魔術隊の技術研究を担う『魔術研究ギルド』の所属であったが、過去、ある事件を経てそこを辞めた。

だが、フリーランスの魔術師となつてからも、魔術研究ギルドの魔術師は何度も彼を引き戻そうと、乱暴な手段も厭わずに彼にアプローチし続けたのだ。

彼はそんな事もあり、魔術研究ギルドの魔術師を一層、嫌うようになった。

ところが、目前の帝国魔術師は、上目遣いで、彼に訴えかけた。今までの帝国魔術師からは想像できない様な涙声で。

「ヴェルガ！！ 君だけが頼りなんだ！ 我々を助けてくれ！」
そこに居たのは、美しすぎる金の短髪を持つ美少女だった。

吸い込まれそうな青い瞳が彼：ヴェルガその人を見つめている。

背中には、大型の軍用の杖である「正式採用十八式魔槍」が背負われていた。

「い…いきなり何を言うんだ」

「我々を助けてくれ！」

彼、もといヴェルガは、困惑した頭のまま、ともかくこの少女の話聞くことにした。

「良いから、中に入って話を聞かせるんだ」

魔力の流れを絶つ機能を持ったマントを羽織ったまま、ヴェルガは彼女を自らの向かいに座らせた。

朝食は、魔法で移動させてすぐ近くの棚にしまっておいた。

「話を始めてくれ。私も用事の途中でね。…さあ、飲みたまえ」

ヴェルガは、水を彼女の目の前に出したコップに注ぎながら告げる。

「ありがとう」

嗚咽を含んだまま礼を言って、両手でコップを持ち、少女は水を飲んだ。

一息ついて、少女は話を始める。

「私が出かけている間に…ギルドの皆が…襲撃を受けたんだ…皆を助けて欲しい!」

「襲撃…か。それは軍からか？ それとも名の知れた山賊か？ ま

さか野良の魔術師ではあるまい」

「それが…魔獣に…なんだ…」

「魔獣？ そんなものが何故あの地域に居るんだ。あのあたりどころか、魔獣なんて探しても見つからない様な代物だろう」

その落ち着き払った言葉を聞いて、少女は身を乗り出した。

両手で持っていたコップの水は、容赦なくヴェルガに降りかかる。

「だからこそ…軍や騎士団では対抗できないんだ！この頼み事は…君にしか…君にしかできないっ!」

ヴェルガは、その熱意に再び眉を顰めながら、右目のモノクルの水滴を胸元から取り出したハンカチでぬぐった。

【〜〇？〜オリジン】

【〜〇？〜オリジン】

気乗りしないが…良からう。私は、話に乗ってやることにする。女性には最大の礼儀を持って。という我が家の家訓もあるが、魔術研究ギルドには忘れ物もしているし、なにより彼らは莫大な資金から私に報酬を払うことになるだろう。

そうなれば、心躍る数字を見られることは決定事項と言っても過言ではないはずだ。

ヴェルガは、ルーニャ、件の少女を家の外に出すと、クリーム色のスーツの上に黒いコートを羽織って、フード付きマントを羽織った。

背中側は鋭利なV型をしている。

ホルスターは戦闘が想定される場合に装備する特殊なものを使う。前部に切込みが入れられていて、いざという時は前部を裂くようにして素早く杖を取り出せるようにしたものだ。

最後に、様々な呪いや、邪悪な空気を吸わぬように魔術式を仕込んだ白いマスクを後頭部に掛けて、準備は完了である。

上半身だけが異様にガチャガチャとして、アンバランスな姿だが、これが長年の仕事で彼が見つけた最高の装備なのだ。

「遅くなってすまない。さあ、行こう」

「うん…」

ヴェルガ邸の建っている深い森林、『ミューラーの森』から、ルーニャを乗せて一キロほど馬で行くと、最寄の町へ出た。

青い空、赤いレンガ壘が美しい町並みを馬に乗ったまま進んでい

ると、ルーニヤは何かに気づいた。

何故だか、流れていく街の人々は、ヴェルガを意識的に直視しないのだ。

確かにヴェルガの金の瞳は珍しい色の上に鋭く、その上瞳孔は縦に鋭く長いというものだが、陽光を受けたその瞳は見入ってしまうほどに美しい。

ルーニヤは、自らの好奇心を抑えきれず、ヴェルガへとその疑問をぶつけた。

「何故、皆、君の瞳を見ないんだい？　こんなに美しいのに……」

ヴェルガは少しだけ振り向き、ルーニヤを一度片目で見ると、すぐに前へ向き直り、口を開く。

「人は賢い。故に、それそのものよりも、それに含まれた意味などに注視してしまうものなんだよ」

「……君は……難しいことを言うね」

あまりに遠まわしすぎて、たった十五のルーニヤには意味が解らなかつた。

その意味を理解しようと、頭の中で考えを巡らせている間に、馬蹄の音が、馬車乗り場の前で止まる。

ヴェルガは、借り厩舎のすぐ隣で厩舎の馬飼いに金を渡すと、馬を降り、ルーニヤの手をとって馬から下ろして、馬車乗り場の方へ歩き始めた。

馬車を使つらしい。

ギルドから来たルーニヤも、もちろん馬車を使ったので、特に疑問はわかかなかつた。

馬を自ら駆つてギルドまで行くのは、金を払つても回避したいほどにかなり骨が折れる事なのだ。

ヴェルガは、ルーニヤよりも先に金を払つて黒いコーチに乗り込む。ルーニヤも金を払おうとしたが、ヴェルガがルーニヤの分の金を既に払っていた。

暫くの間、二人は特に会話もせず、馬車に揺られていたが、窓か

ら景色を眺めていたヴェルガが突然、何かを思い出したかのように口を開いた。

「ルーニヤ、君は魔獣を見たのか？」

「うん、一瞬だけど、しつかり見た」

「その魔獣の…背中は見えたか？」

「うん…なんだか…紫色の魔方陣が架けられてた」

「フロータか？ ステアーか？」

「ステアーだったと思う…」

ここで、専門家同士の会話の説明を、少し挟もう。

まず、魔方陣は、円や矩形の間に橋を架ける様に描かれる為、「架ける」という。

次に、魔方陣には、紙や地面に描くことによって架けられるものと、中空に描かれるものがある。直接描かれるものが「ステアー」中空に描かれるものが「フロータ」と呼ばれる。

今回の場合、背中に架けられていたということなので、背中には直接接せず、浮遊するように架けられたのか、直接背中に刻まれたのか、ということヴェルガは聞いたのだ。

一通り話を聞いたヴェルガは、すぐ後ろの小窓を開けて、馬を駆るコーチマンへ注文を飛ばした。

「次の街で一度停めてくれ。買い物が見たい」

「はい、承知いたしました」

返事を聞いたヴェルガは、再び窓の外へと視線を戻す。

奇妙な旅は、まだ続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1931z/>

君にしかできないっ！

2011年12月8日01時59分発行